

柏木教会月報

12月号

東京都新宿区北新宿3-1-18

☎03-3368-2156

心が鈍くならぬように

ルカによる福音書二一章二五～二六節

牧師 大浦 勝

「放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならぬ
いように注意しなさい。さもないと、その日が不
意に鬼のようにあなたがたを襲うことになる!」

(三四節)

神は「今おられ、かつておられ、やがて来られる方」であつて(黙示一・八)、永遠から永遠におられるだけではなく、わたしたちのもとへ来て、みわざをおこなつてくださる方である。神はわたしたちを捨て置くことをされず、わたしたちと深くかかわり、わたしたちの事柄をこ自分の事柄として引き受けてくださる。神がこのようにわたしたちと無関係に神であろうとはされないのであるから、わたしたちも神なしの、神とは無関係な者であることはできないし、そうあるべきでもない。今の時はキリストがベツレヘムにお生まれになつた最初の来臨と、「大いなる力と栄光を帯びて」(二七節)おいでになる再臨に囲まれた時である。待降節は今がそのような時であることをわたしたちに思い起こさせる。「あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています」(ローマ一三・一一)。わたしたちの心を鈍くし、キリストを迎える備えを怠らせるものが、この世界には満ち満ちている。繰り返さ

れる戦争やテロや災害やその他の出来事の中で、わたしたちはしばしば「なすすべを知らず、不安に陥る」「この世界に何が起ころのかとおびえ」、恐れる(二五、二六節)。しかし、わたしたちはそれらの混乱の中につても、この世界とそこに住むわたしたちは、再び来たりたもうクリストと、クリストがもたらされる神の国に向かつて進んでいることを見失わないようにしてい(二七、三一節)。神の民はこの世界の中で、世界の希望であるクリストとクリストによる解放を指し示すしとなることをこそ、つとめとして与えられているからである。

この世の樂しみ・生活上の煩い・仕事などが、わたしたちの心を鈍くし、クリストを迎える備えを怠らせることがある。わたしたちにとって大切で、重要と見えることであつても、わたしたちがこの世でかかわることはすべて相対的であり、一時的である。それに心を奪われてしまつて、他のことは何も考えられないというほどの集中は避けたいと思う。「世の事にかかわっている人は、かかるわりのない人のようにすべきです。」この世の有様は過ぎ去るからです」(一コリント七・三一)。

わたしたちはキリストの前に立つ、その時に向かつて進んでいる。何よりも必要なことは、目覚めて祈ることである(二六節)。クリストとの祈りによる交わりを忘れるとき、「その日が不意に鬼のように」わたしたちに臨むことになる(三四節)。待降節は祈ることを学ぶ時である。旧約の詩人が歌つたように、「常に主をわたしの前に置く」こと(詩一六・八、口語訳)、自分が主の前にいる者であることを常に覚えることを学び取りたい。